

## 映画『HACHI 約束の犬』を観て考えたこと

森田盛大<sup>†</sup> (秋田県獣医師会会員)

秋田県獣医師会では、昭和59年から平成12年度まで70歳以上の会員を対象に親睦と懇親を語るため「熟年者懇談会」を開催してきた。これを引き継ぐ形で、砂原和文秋田支部長（県獣医師会長）の提案により、同支部で平成18年度から61歳以上の会員を対象とした「熟年者懇談会」を年1回開催することとした。その主たる目的は、単なる親睦、懇親ではなく、今まで培った経験や知識を生かして一般市民や社会に貢献することにある。

毎年心待ちにしているこの懇談会が、今回は8月下旬に開かれた。しかも、今回の懇談会は評判の映画『HACHI 約束の犬』映画鑑賞という一大付録もついていた。

私は、これまで猫6匹と犬2匹を飼ってきた。いずれも雑種で、雌雄にかかわらず、「〇〇兵衛」と名付けてきた。そして、彼らは、健気にも、その時々のおさやかな生活に様々な変化や和やかさ、潤いを与えてくれた。にもかかわらず、獣医師である私が殆ど全く手を施し得ないまま、すべて長生きすることなく逝ってしまった。その中には、盛岡に講義に出掛けた折の夜半、死亡したとの電話を受けた猫や、「今度来るまで、ちゃんと留守番しておれよ」と言い残して去った、トルコ・アンタルヤの陋屋の中で死んだ知らせを受けた犬もいた。この2匹は、看取れなかっただけに、別れが直ぐには実感できなかった。しかし、そのほかは、私自身何ら為すすべもなく、ただおろおろと見送るだけであった。微生物の虜になってしまった私には、獣医臨床という世界は殆ど全く希薄であったから、獣医師であって獣医師でない獣医師と言われても、宣なる哉、と返す言葉がない。

もう二度と飼うまいと、その都度、心に決めた。しかし、時が経って、切なさが少し薄れてくると、性懲りもなく、またぞろ飼いだした。そんなことを繰り返してきたのだ。しかし、最後の芳兵衛が死んだ時は、さすが今度こそは、と諦めた。

その埋め合わせという訳ではなかったが、その頃から、動物を描いた映画やビデオをよく観るようになった。例えば、岩手山山麓を舞台にして、少女と馬の交流を叙情的に描いた、戦前の高峰秀子主演の『馬』、20世紀最高と言われた動物記録文学を映画化した『野生のエルザ（ライオンのお話）』、新田次郎賞を取った中野孝次の

原作を映画化した『ハラスのいた日々（犬のお話）』、秋田県の県北を舞台にした、マタギ一家の『イタズ（熊のお話）』、日本南極探検隊が南極に残してきたカラフト犬の実話を映画化して、大ヒットした『南極物語』、盲導犬の一生を描いた『タイール』などである。

取り分け、時を挟んで、繰り返し観たのが神山征二郎監督、仲代達矢・八千草薫主演の『ハチ公物語』であった。舞台が秋田県の大館、しかも、主役が秋田犬となれば、それだけでも、惹かれてしまう。『忠犬ハチ公』の話は、渋谷駅前の銅像を持ち出すまでもなく、殆どの人々が知っていることなので、わざわざ説明する必要は全くないだろう。この『ハチ公物語』が、これまで観たこの種の映画の中で、心情的には、私が最もひかれたものであった。

それだけに、米国版ハチ公物語『HACHI 約束の犬』はどうだろうか、その期待は大きかった。いそいそと映画館へと出掛けた。やがて、始まった。最近の映画作製技術は一段と進んだのか、映画も色彩も音響も素晴らしく、冒頭部から引き込まれていった。主演のリチャード・ギアも舞台も、勿論、秋田犬のHACHIもよかった。

しかし、オリジナル版の『ハチ公物語』を下地にして観ている内に、次第に何か落ち着かなくなってきた。期待していたものとは、どこかほんの少し違うのだ。何故だろうか？ その時は、画面の展開に考える余裕はなかった。後になって考えてみると、1つには、設定の多く

## 森田盛大

## — 略 歴 —

1960年 岩手大学卒業  
以後、静岡、青森県に勤務。  
1971年 秋田県衛生科学研究所細菌病理科長  
1990年 同所所長  
1997年 同所定年退職  
同年～1998年 JICA「トルコ感染症対策プロジェクト」に関する長期調査に従事し、チームリーダー兼専門家としてプロジェクトを完遂  
現 在 秋田県食品安全推進委員会委員長ほか



<sup>†</sup> 連絡責任者：森田盛大（秋田県獣医師会）

があまりにも『ハチ公物語』に類似し、しかも、「これは、何故？ 無理では？」と思えるような設定もあって、それらが作用したのではなかろうか。そんなことがあって、少しずつ落ち着かなくなってきたようだ。私には、映画の良否を語る何物も持たないが、オリジナル版と重ね合わせて観ていると、つい、そんなさざ波のような不協和音を感じてしまったのである。

とは言え、最後のシーンが終わると、点灯を待たずに、そっと席を立った。年甲斐もなく、頬を伝った涙が気恥ずかしかったからである。外に出て、たばこに火をつけた。そして、やはり、この映画を観て良かったなあ、と思った。アメリカ的感情や心情からすれば、こういう流れになるのだらうなあと思うと、『HACHI』はそれなりに、良かったのではなかろうか。

そんな『HACHI』を観て暫くしてから、たまたま立ち寄った本屋の店頭で、2冊のハチ公を見つけた。この映画のヒットで出された？ 少年少女向けの本である。1つは、『ハチ公物語』の原作。もう1つは、ハチや飼い

主の上野教授の年譜を添えた、実話的なものである。

そんなことがあって、もう一度、『ハチ公物語』を観たくなり、いつも行く図書館から借りてきた。どちらの映画が良かったのか、そんなことを比較してみようなどと思ったのでは決してない。ただ単に、心情的に近いハチをまた観てみたいと思ったに過ぎない。そして、観た。やっぱり、いつもと同じように、今度もまた、感動した。

ところが、それを観ていた時、「もう一度、犬を飼ってみようか」という気持ちが、ふうっと、湧いてきた。

しかし、やはり、諦めた。ハチの逝った翌年の2・26事件の年に生まれた私の歳を考えると、「ハチ公やHACHIの二の舞をつくりかねない？」などというのは全くの冗談だとしても、どちらが先に逝くかは別にして、とにかく、切ない死に別れだけは、もう嫌である。せいぜい、映像の世界でハチやHACHIを飼おうと思って、諦めた。